

学校便り



合い言葉「超升先輩」



2025年7月17日
中津川市立坂下中学校
「自立・共生・創造」
生徒数133人

今号では、「第44回少年の主張中津川市大会“私の主張2025”」に坂下中学校から代表で出場した、3年 原 実乃梨さんの主張作文を紹介します。

「当たり前という幸せ」

皆さんの「幸せ」とは、どんなことだろうか。ゲームをすること、友達と話すこと、美味しいものを食べる。人それぞれ幸せだと感じることは違いうだろう。私にとっての幸せは、帰る場所があり、美味しいご飯をお腹いっぱい食べ、気持ちよく寝ることだ。

私は今まであまり「幸せとは何か」について考えずに生活をしてきた。しかし、「ご飯できたよー。」母に呼ばれたときだ。突然思ったのだ。当たり前のようにご飯を作ってくれる母がいて、美味しいご飯が食べられる。この生活が、私にとっての幸せなのだと、直感的に思った。私にとっては、特別でもない、当たり前やってくる毎日にだ。

努力しなくても得られる幸せ。しかし、世界には私達が当たり前のようにしていることが、当たり前できない人々がいる。その中には、私達と同じ歳の子もいれば、もっと幼い子もいる。そんな現実が今、この地球上にあるのだ。

ユニセフによると、2022年には世界の約7億3300万人が栄養不良だったということだ。つまり、世界人口の約10パーセントが十分にご飯を食べることができていないということになる。また、2023年時点で、世界の6歳から17歳の約15パーセントが学校に通えていなかったということだ。これを見て私は、当たり前にご飯を食べられていること、当たり前学校に通えていること、この生活がとても幸せだということに改めて気づかされた。

例えばウクライナ戦争。2022年から始まり、3年以上たった今でもロシアによるウクライナ侵攻が続いている。戦争が始まる前は、私達とあまり変わらない生活をしていた家族や人々。しかし、戦争が始まってからは、大切な家族が戦場に送り出されたり、何の罪もない人々が巻き込まれたりしている。食べたいものが食べられないし、安心して眠れる場所が確保されないかもしれないし、学校にも通えないかもしれない。現代の日本では、戦争はいけないものと教えられている。しかし、私たちが歴史上のこと、昔のことと捉えていた戦争が、今でも続いていることについて、私はひどく違和感を覚えている。

当たり前ができていない人々が日本にもいる。去年の能登半島地震と豪雨災害により、家族や友人と、もう二度と会えなくなったり、安全な場所と認識していたであろう自分の家がなくなったり、今まであって当然だったものが、一瞬にしてなくなってしまうのだ。学校は避難所になり、温かい食事をとることも難しい状況だった。1年以上たった今でも、現地では仮設住宅で生活している人がいる。私だったら、地震が来て家族や友人が亡くなってしまうたら、本当にどうしようもなく、これからどうすればいいのかわからないだろう。それと同時に、今よりもっと、当たり前の偉大さを知ることになるだろうと思う。未来のことなんて誰にもわからない。だからこそ、いつ崩壊するか分からない、今ある当たり前の生活をもっと大切にすべきだと思う。

私は主に学校、食事の話をしたが、私達が当たり前に行っていることは、もっとたくさんある。むしろ、私たちの生活のすべてが当たり前になっていると思う。でも、そのほとんどは、誰かに支えられて成り立っている。家事を毎日してくれる母、学校に通わせてくれる両親。そして、勉強を教えてくれる先生、一緒に遊んでくれる友人。私たちはいつも誰かに支えられ、自分なりの当たり前という幸せを実現することができる。だから、支えてくれるすべての人に今後も感謝しながら生活していきたい。この思いを一人でも多くの人に知ってもらえば、日々の生活を大切にする人が増え、よりよい社会になっていくのではないだろうか。私は、当たり前という幸せに感謝し、このかけがえのない毎日を大切に生きていきたいと思う。



実は、前日まで3年生は修学旅行に出かけていました。それでも、実乃梨さんはとても良い表情で、堂々とした主張を披露していました。発表後、聞いていた方が私に声をかけてくださいました。「『幸せとはどんなことだろう』と聞かれてドキッとしました。確かにあまり考えたことがなかったように思います。話を聞いて、考えることが大事だと改めて思いました。」

聞いた人の心に届く、すばらしい主張でした。ぜひ皆さんも、主張を受け止め、一緒に考えてみてください。

校長 久野 智治